

6.4 淡水魚類



(1) 県内の淡水魚類の概要

富山県は本州の日本海側中央部に位置し、富山湾に面している。標高 3,000m 級の立山連峰を有し、年間降水量が 2,000mm を超える豪雪地帯である。県東部には急流河川（常願寺川、早月川、片貝川、黒部川、小川）が多く、一般的にいわれる流れが穏やかな河川下流域は少ない。県中央部を流れる神通川流域には大きな平野部があり、さらに県西部の庄川や小矢部川流域では比較的緩やかな勾配の扇状地が広がり、流れの緩い下流域がある。また、放生津潟や十二町潟もあるが、大きく改変されている。

県内全域で古くから治水や電力開発が進められてきており、河川には上流から下流まで、たくさんダムや堰堤などが作られている。また、稲作が盛んで各扇状地には多くの用排水路が整備されており、コンクリート化が進んでいる。各河川の流域での水の配分も人為的に行われることが多く、夏期の県東部では用排水路に水が流れる一方で、河川本流での減水や断水が多く見られる。さらに近年では、自然災害が多いこと也有り、河川内の河床を平坦にする工事も進んでおり、生息環境の改変も多く見られる。以上のように、富山県はもともと淡水魚の生息には多様性が低い地域であるが、さらに人的な改変が大きく進んでおり、淡水魚の生息にとっては悪化が続いている。

一般的に、河川や湖沼などの淡水域に生息する魚類を淡水魚とよんでいる。魚津水族館の集計（未発表）によると、富山県では 2024 年現在で 121 種の淡水魚の確認記録がある。121 種には、もともとは富山県に生息していなかった国内外来種 23 種と国外外来種 20 種が含まれており、これらを除くと富山県の在来淡水魚は 78 種となる。この在来淡水魚を生活史に基づいて分けると、淡水域で一生を終える「純淡水魚」が 25 種、生活史の一時期を海で過ごす「通し回遊魚」が 26 種、さらに普段は海で生活するが時に淡水域に侵入する「周縁性淡水魚」が 27 種に分けられる。「純淡水魚」にはコイ科、ナマズ科、ドジョウ科が多く含まれており、「通し回遊魚」にはサケ科、ハゼ科、カジカ科の多くが含まれる。また「純淡水魚」に含めたニッコウイワナやウグイ、「通し回遊魚」に含めたサクラマス（ヤマメ）の 3 種では、状況によって「純淡水魚」と「通し回遊魚」の生活史が存在する。

(2) 選定評価の方法

レッドリストの改訂にあたり、前回の「RDB とやま 2012」を引き継ぎ、県内の「純淡水魚」と「通し回遊魚」の計 51 種を主対象として 2013 年以降の文献調査を行い、必要に応じて現地調査を行って検討した。基本的に 2012 年から 2024 年の調査記録をもとにしているが、2023 年および 2024 年の淡水魚の生息状況に重きを置いて判断した。

(3) 選定種の概要

「RDB とやま 2025」を「RDB とやま 2012」と比較すると、「絶滅+野生絶滅」はホトケドジョウとニホンイトヨ（旧・イトヨ日本海型）の 2 種で変わらない。ホトケドジョウは生息情報があったので現地調査をしたが確認できなかった。ニホンイトヨは富山県だけでなく日本海側全域で激減しているが、理由は不明である。

「絶滅危惧 I 類」も 2012 と同様の 7 種である。イタセンパラ、ヤリタナゴ、ミナミアカヒレタビラのタナゴ類は、平野部の流れの緩い場所に生息し、繁殖に淡水二枚貝を必要とする種で、もともと県内では生息地が限られている。同様に、クロヨシノボリ、キタスナヤツメ（旧・スナヤツメ北方種）

も、県内で確認された生息地が限定的である。カワヤツメは、古くは各河川で見られていたが、近年では情報が少ない。アカザは県内各河川の上中流域に広く見られたが、近年は部分的な確認にとどまっている。ダムや堰堤などの建設による生息地の激減に加え、河川改修による川底の浮石の減少などによる生息環境の悪化が大きな要因と思われる。

「絶滅危惧II類」は7種で種数は変わらないが、2012で入っていたナマズが準絶滅危惧種にランクダウンされ、新たにシロウオが準絶滅危惧種からランクアップされた。シロウオは「通し回遊魚」で、普段は沿岸海域で生息しており、春に河川に遡上して下流域で産卵する。古くは、県内河川でも群れを成して遡上する姿が見られたが、近年では採集記録が限定的である。ただ、沿岸海域ではナイトダイビングなどで目撃されており、個体数は少ないものの生存は確認している。海域の生息状況悪化や河川下流域の産卵に適した場所が減少したことが減少要因として考えられ、絶滅の危険性が増していると判断した。その他、同じハゼ科のジュズカケハゼ、シンジコハゼ、ルリヨシノボリやカジカ科のカンキョウカジカ、カジカ中卵型という底生の種では、やはり河川整備などによる生息域の減少や生息環境の悪化が大きく影響しているが、ある程度の確認例があるので据え置いた。この中のジュズカケハゼに関しては、近縁のホクリクジュズカケハゼや広域種などとの分類が明確に行えておらず、課題を含んでいる。また、カジカ中卵型は、もともと富山県内の記録は少なかったが、近年、生息場所も個体数も増加してきている。増加の要因は明確でないが南日本からの流入が推測され、温暖化による海域の環境変化が影響している可能性がある。トミヨ属淡水型は、分類上の混乱で名称は明確ではないが、いわゆる従前のトミヨである。県内では平野部の小河川や用排水路で、主に湧水のある所に生息している。もともと生息地が限定的であるが、以前から保護の対象とされており、生息環境の改変は少ない。ただ、古い記録があった小矢部川水系でほぼ見られなくなっているが、現存のトミヨ生息地においても河川工事や地球温暖化に伴うと思われる湧水の減少が懸念される。

「準絶滅危惧種」は12種で、2012の8種から増えている。前述のナマズに加えて、「情報不足」や「地域個体群」のカテゴリーから変更した種が増えた。富山県の象徴的な魚であるサクラマス（ヤマメ）では、海から河川に遡上するサクラマスは激減しているものの、水産上の重要種であり、種苗放流がされているのでランクを据え置いた。ドジョウの生息地は県内各地に散在しているが、総じて生息に適した泥底の減少が心配される。ドジョウは近年の遺伝的な研究で富山県ではドジョウとキタノドジョウの2種に分かれるとされており、詳細な調査結果が待たれるところである。アジメドジョウは県東部の角川が日本の分布の東限にあたり、同様にカワヨシノボリも上市川を東限としており、富山県の淡水魚として特徴的なことから、2012では「地域個体群」としていた。両種とも県内に広く分布しているものの、河川改修などによる生息環境の悪化が懸念されるので準絶滅危惧種とした。ジュウサンウグイは旧・マルタである。2012では「情報不足」としていたが、近年では神通川などの下流域や海域で確認されていることから、準絶滅危惧種とした。ただ、ウグイと混同されており、確実な捕獲情報が少なく、今後は春季の産卵期における調査が必要であろう。ドンコは分布が県西部の平野部に限られており、生息状況は大きく変わっていないことから現状維持とした。ビリンゴは県東部の片貝川などの河川で、河口や下流域で生息や産卵が確認できたので、2012の「情報不足」からランクアップした。ナマズは県内各地の下流域や用水路で確認できたので、2012の「絶滅危惧II類」からランクダウンした。キタノメダカ（旧・メダカ北日本集団）、アユカケ（カマキリ）、カジカ大卵型、ミナミスナヤツメ（旧・スナヤツメ南方種）は、状況の大きな変化が認められないでランクを据え置いた。

「情報不足」のニホンウナギは野外での捕獲情報が少なく、2012と同様にした。県東部でウナギの

放流情報があったが、詳細は不明である。「地域個体群」のニッコウイワナは雲の平周辺の山岳地帯での調査が行われておらず、2012と同様にした。なお、2012年で「情報不足」であったイチモンジタナゴは、国内移入種としてリストから除外した。また、ゴクラクハゼも2012年では「情報不足」であり、当時は県東部河川などで少数が確認されていた程度であったが、近年では分布を広めて各地で大量に確認されるようになったためリストから除外した。ゴ克拉クハゼのように、富山県より南に分布していた魚種が突然表れて、急激に分布を広げる状況は温暖化の影響とも考えられ、今後も注目すべき点である。

(4) 絶滅の危機に追い込んでいる要因（減少要因）

富山県の平野部は農耕地や住宅地として古くから人為的に開発されており、河川の治水も進んでいる。そのような中で、淡水魚の減少の一番大きな原因は生息地の減少と生息環境の悪化である。これは長年にわたる大河川や小河川、そして支流の改修工事に加えて、用排水路のコンクリート化も進んできた結果である。また、沼地や潟の消滅および規模の縮小もある。さらに、魚の移動の妨げになるダムや堰堤が数多く設置されており、本来の生活環を全うできない環境となっている。加えて、河川水に関しても、農業用水や工業用水、生活用水を優先しており、河川本流での流量の減少や水枯れ、瀬切れなどが夏期から秋期に起こっている。一方、近年の温暖化による影響も顕著になっている。例えば集中豪雨によって既存の堰堤や堤防などの破壊が起きており、そのあとの復旧工事や予防的な河川工事などによって、河川の直線化や河床の平坦化が進んで淵が減少している。加えて、河川域内の草木が伐採・除去されることが増えており、昆虫などの生息場所が失われ魚類の餌環境も悪くなっている。そして、地球温暖化による水温上昇や湧水の減少も大きなダメージを加えている。特に海と川を利用する通し回遊魚では、河川環境だけでなく海域の温暖化も大きな影響を与えており、今回は掲載しなかったがサケの減少が著しい状況にある。サケの場合は種苗放流をしており資源量を判断することは難しいが、全国的にも激減している。今後、富山県においては放流しても資源の回復ができない可能性が出てきている。

(5) 種のリストの整理基準

原則として、和名、学名などは「山溪ハンディ図鑑15 増補改訂 日本の淡水魚 2版 (編・監修 細谷和海、2023)」を参考とした。本書は価格も手ごろで、写真には産地が記されており、内容も「形態・生態・分布・特記事項」と分かりやすいものになっている。レッドデータブックを読まれた人が参考にする本としても有効である。魚類の分類は、遺伝的な手法の進歩もあり、急速に変化している。しかし、遺伝的な研究と従来の分類との整合性が曖昧な種も多く、それらに対応した外形的な分類の整理も必要であろう。

(6) 今後の対応について

今回の改訂にあたり、手持ちの情報が限られており、判断に窮することが多かった。一方で、国県などが有する調査結果の提供を受けられたことは感謝したい。今後も、情報の提供を望みたい。これまで、魚津水族館や富山県生物学会などの関係者で、野外調査として捕獲調査や潜水調査を行ってきたが、人的にも、時間的にも限界がある。今後は、協力者を募るとともに、広域的な調査のために環境DNA調査などの手法を取り入れて、現地調査と併せて効率的で計画的な調査を行って次のRDB作成に備えたいものである。今後も、人為的な河川改修に加えて、外来種の導入や地球温暖化による

影響が予測されることから、種や地域を選定した保全対策の実施が求められる。普段はあまり目にしない淡水魚であるが、淡水魚の状況を知ることは水環境を知ることであり、それは人類に役立つデータであると信じる。「RDB とやま 2025」の情報は、これから環境保全対策はもとより、ネイチャーポジティブの観点からも、多くの自治体や企業などで活用されることを願っている。

(7) 謝辞・協力者

今回の改訂にあたり、次の方々や機関から貴重な情報の提供および調査にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。(五十音順、敬称略)

金子芳治・田村正次(いみず水辺の愛好会)、秦 康之(環境省)、国土交通省富山河川国道事務所、富山県自然保護課

(文責: 稲村 修)

ホトケドジョウ (コイ目・ドジョウ科) *Lefua echigonia* Jordan and Richardson, 1907

富山県 2025 カテゴリー：絶滅+野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IB 類

選定理由

富山県での最後の記録は 1935 年である。また、その報告地域である小矢部川水系で目撃情報があったので、2024 年に追加調査を行ったが確認できなかった。

形態

全長 4~8cm。円筒形の細長い体形であるが、頭部上面はやや平たい。4 対の口ひげをもち、眼下の棘はない。

国内の分布状況

東北地方から兵庫県までの本州。

県内の分布状況

確実な記録は小矢部川中流域（支流を含む）での土肥（1935）の記載だけである。

生態・生息環境

湧水を水源とする湿地や細流、水たまりなどに生息する。水温が低いため池などにも生息する。

生存への脅威（減少の要因）

小矢部川中流域周辺の河川改修および圃場整備などが進み、生息に適した細流や水たまりなどの生息地が消失したと考えられる。

特記事項

隣県の新潟県と石川県には、現在も生息地がある。

撮影：稻村 修（石川県産）

（文責：稻村 修）

ニホンイトヨ (トゲウオ目・トゲウオ科) *Gasterosteus nipponicus* Higuchi, Sakai and Goto, 2014

富山県 2025 カテゴリー：絶滅+野生絶滅
環境省 2020 カテゴリー：地域個体群
(本州のイトヨ日本海型)

選定理由

かつて生息が確認されていた場所の環境変化が著しく、本種の生息に適する場所の多くは消失している。RDB とやま 2002 以降の生息が確認されていない。日本海側各地で急激に姿を消した要因が不明である。

形態

全長 7~8cm。背びれの棘は 3 本、銀白色の体色、鱗板のつながりが完全、背びれ軟条数が通常 14 本、尾部隆起縁が柔らかいことで近縁種から分けられる。産卵期にはオスが鮮やかな赤と青の婚姻色に彩られ、腹部が卵で膨れたメスは銀色にかがやく。

国内の分布状況

北海道および本州の日本海側、主として河川の下流域。

県内の分布状況

春の繁殖期に、富山県内のほぼ全域の河川下流域や沿岸海域で生息が確認されていた。

生態・生息環境

成魚は春（3~5 月）に海から河川へ遡上（そじょう）し、泥底で水草が生えている河川敷の水たまりや水路などに入って産卵する。オスは泥底に浅い窪みを掘り、水草の破片を集め巣を造り、メスを誘って産卵させる。卵や孵化した仔魚（しきょ）はオスが保護をする。稚魚はしばらくの間、産卵場所の近くで群をなして生活するが、水温が高くなる 7 月に入ると海へ下り、海域で生活するとされる。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修によって、下流域にあった水たまりや水草の繁茂する流れの緩い水域は激減し、産卵場所や稚魚の生育場所が消失した。また、水路などに段差ができる、海から遡上できなくなった場所もある。

保全対策

生息環境の復元を行い、イトヨの産卵場所および稚魚の生育場所を整備し、海から移動できるようにすることが考えられる。しかし、日本海側各地で急激に姿を消した要因が不明で、この要因の解明と対応策が先決である。

特記事項

かつて新潟県では食用に漁獲され、石川県でも河北潟で多量に漁獲されていた。富山県内でも各下流域で多く見られた。また、沿岸に敷設されたホタルイカ定置網でも混獲されていた。RDB とやま 2012 ではイトヨ日本海型としていたが、ニホンイトヨに種名変更されている。日本列島とその周辺域に生息するイトヨは、本種のほかに太平洋系降海型イトヨと太平洋系陸封型イトヨに細分化されている。



撮影：稻村 修

（文責：稻村 修）

カワヤツメ (ヤツメウナギ目・ヤツメウナギ科) *Lethenteron camtschaticum* (Tilesius, 1811)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

かつては成体の遡上(そじょう)や産卵が多数確認されていたが、近年は確認情報が極端に減っている。幼生個体の確認も極めて乏しい。

形態

成体は全長 50cm ほどの細長いウナギ型をしており、円盤状で下顎(したあご)のない口と 7 対の鰓孔(えらあな)をもつ。対鰭(ついき)をもたない。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、眼がなく、じょうご型の口をもち、成体とはかなり異なった形態をしている。

国内の分布状況

北海道、本州の山口県および千葉県以北。

県内の分布状況

県内全域の河川に遡上すると考えられるが、最近の確認は、神通川、庄川、小矢部川などの大規模水系と氷見市の河川のみである。

生態・生息環境

アンモシーテスと呼ばれる幼生は、河川の中流から下流の泥や砂が堆積している所において、4~5 年後に 20cm 程度になると変態し、成魚となって海に下る。海中で 2~3 年を寄生生活しながら過ごし、30~50cm に成長して秋から春にかけて川に遡上し、礫底に産卵床を造り集団で産卵する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河道直線化）、圃場整備（特に水路護岸）、水質悪化により、幼生の生育に適した砂泥底や産卵に適した平瀬が減少している。ダムや堰堤の設置により遡上が妨げられ、好適な産卵場所に到達できていない恐れがある。沿岸域の水温上昇や水質悪化など、海洋環境の変化も懸念される。

保全対策

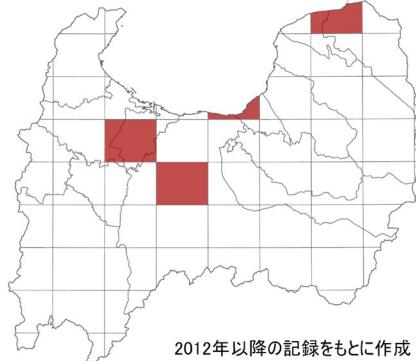
河川改修の際、川底をコンクリート張りとせず、水草が生育できる環境を整える配慮が必要である。また、流れの一部を妨げる構造物の設置などを行い、河岸に砂礫が堆積する場所の整備も求められる。さらに、遡上阻害を避けるために、堰堤に魚道を設置することが必要である。

特記事項

周辺県においても個体数減少が著しい。かつては食物として利用していた地域もある。



撮影：山崎 裕治



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：山崎 裕治）

キタスナヤツメ (ヤツメウナギ目・ヤツメウナギ科) *Lethenteron mitsukurii* (Hatta, 1901)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

分布縁辺域にあたり、生息域が狭い範囲に限定されている。加えて、生息環境の悪化が今後も進むことが危惧され、現状では絶滅の恐れが高い。

形態

細長いウナギ型の体形をしているが、口が吸盤状で顎がないので一見して区別できる。成魚で 20cm 未満。眼の後ろに 7 個の鰓孔(えらあな)がある。対鱗(ついき)をもたない。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、眼がなく、じょうご型の口をもち、成体とはかなり異なった形態をしている。



国内の分布状況

北海道と本州の琵琶湖以北。

県内の分布状況

庄川扇状地帯を流れる湧水性河川に限られる。

生態・生息環境

幼生は冷水を好み、河川の中流域の湧水地帯や湧水が流入する用排水路で、川底に泥や砂が堆積している場所に生息し、泥の中の藻類や有機物を食べて生活する。3~4 年の幼生期の後に変態する。変態後は摂餌をせず、小礫底の平瀬で産卵した後に死亡する。



生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河道直線化）や圃場整備（特に水路護岸）により、幼生の生育に適した砂泥底や産卵に適した平瀬が減少している。また地下水利用の促進による地下水位の低下が進み、湧水が継続的に供給される環境が減ってきている。さらに、生息水域が住宅地に隣接し、生活排水の流入や生活ゴミの投棄に伴う水質や底質の悪化および餌環境の劣化も懸念される。加えて、堰堤が個体の移動を妨げており、生息地の分断化やそれによる小集団化が懸念される。

保全対策

現在の生息地が極めて限定的であるため、生息地の保全が重要である。その際、湧水の継続的な確保が必要である。さらに用排水路の改修の際、川底をコンクリート張りとせず、河岸や河床に砂泥が堆積し、水草が生育できる環境を整える配慮が必要である。

特記事項

従来スナヤツメとして扱われていたが、外見的特徴が類似するキタスナヤツメ（スナヤツメ北方種）とミナミスナヤツメ（スナヤツメ南方種）に大別されることが明らかになった。他地域とは産卵期が異なる。

（文責：山崎 裕治）

ヤリタナゴ (コイ目・コイ科)

Tanakia lanceolata (Temminck and Schlegel, 1846)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類

環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

産卵対象とする二枚貝類の生息地域が極端に減少したため、生息地が局限され、個体数も減少した。また、現在の生息地の環境も年々悪化している。



形態

全長 10cm ほどで、タナゴ類のなかでは大きく、体高が低いことが、和名の「槍（ヤリ）」の由来となっている。産卵期のオスは、口の周辺に追星（おいぼし）が生じ、体側は前半が赤色、臀びれの下部は鮮やかな赤色の婚姻色となる。

国内の分布状況

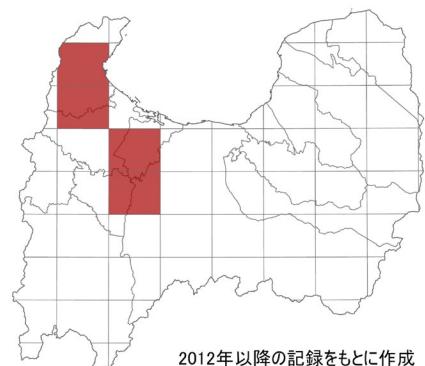
本州、四国、九州北部。

県内の分布状況

下条川、小矢部川、仏生寺川・万尾川、上庄川の各水系。

生態・生息環境

イシガイなど二枚貝類の生息する流れの緩やかな河川や水路に生息し、メスは 4 月から 7 月に二枚貝類の出水管に産卵管をさし込んで産卵する。



生存への脅威（減少の要因）

河川改修や圃場整備（護岸、直線化）が進み、生息環境の喪失および生息地の分断化が進んでいる。これらの状況は産卵対象とする二枚貝類にとっても脅威となっており、二枚貝類の減少が本種の繁殖機会の低下をもたらしている。さらに、オオクチバスなどによる捕食やタイリクバラタナゴとの産卵対象である二枚貝類および餌や生息地の競合が生じている。

保全対策

産卵対象とする二枚貝類の生息環境の保全と外来魚の駆除が必要である。

特記事項

全国的に、本来の分布域ではない地域に定着し、国内外来種にもなっている。

（文責：西尾 正輝）

選定理由

他のタナゴ類と同様に、産卵対象とする二枚貝類の生息地域が極端に減少したため、生息地が局限され、絶滅の恐れが非常に高い。また、密漁の影響があることから、2015年に富山県の「指定希少野生動植物種」に指定されている。

形態

全長 8cm ほどでヤリタナゴよりやや小さい。産卵期のオスは口の周辺に追星(おいぼし)ができ、婚姻色は臀びれの下縁部が桃色を呈し、縦帯の青色が目立つ。



撮影：西尾 正輝

国内の分布状況

北陸地方（富山県、石川県および福井県）と山陰地方（鳥取県および島根県）。

県内の分布状況

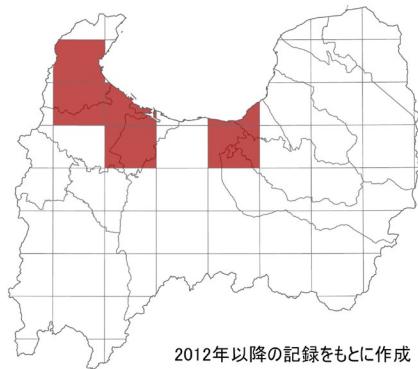
富山市、砺波市、射水市および氷見市の河川、水路や池沼。

生態・生息環境

メスは4月から7月にイシガイなど二枚貝類の出水管に産卵管をさし込み産卵する。これら二枚貝類の生息する流れの緩やかな河川、水路および池沼に生息する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修や圃場整備（護岸、直線化）が進み、生息環境の喪失および生息地の分断化が進んでいる。これらの状況は産卵対象とする二枚貝類にとっても脅威となっており、二枚貝類の減少が本種の繁殖機会の低下をもたらしている。さらに、タイリクバラタナゴと産卵対象である二枚貝類や微生息場所を巡る競争により、本亜種の生存が危ぶまれているとの報告がある。密漁も心配される。



2012年以降の記録をもとに作成

保全対策

産卵対象とする二枚貝類の生息環境の保全と外来魚の駆除が必要である。氷見市ではイタセンバラ保護池で本種の保存を継続している。

特記事項

ミナミアカヒレタビラは、北陸地方と山陰地方の大きく2つの集団が確認されている。富山県産の本亜種は、その塩基配列が北陸系統の塩基配列と一致していることから、在来個体である可能性が高い。

（文責：西尾 正輝）

イタセンパラ (コイ目・コイ科) *Acheilognathus longipinnis* Regan, 1905

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IA 類

選定理由

日本固有種で、富山県では氷見市十二町潟周辺の河川に生息するが、生息範囲が著しく狭い。産卵を利用するイシガイ類などの二枚貝減少で生存への脅威が継続した場合、絶滅のおそれが非常に高い。

形態

全長 8cm ほどで、タナゴ類の中では最も体が薄く体高が高い。体の後半にある背びれと臀びれが、尾びれの近くにまで達し、産卵期のオスは赤紫色の鮮やかな婚姻色で彩られる。メスの産卵管は 2cm 程度の長さであり、他のタナゴ類と比較して短い。



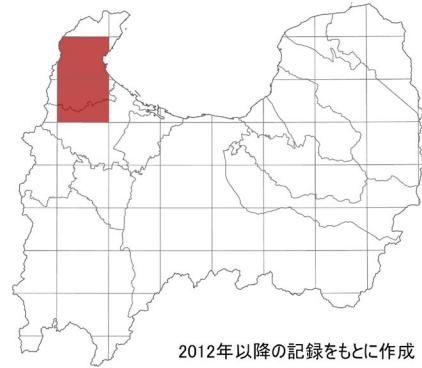
撮影：西尾 正輝

国内の分布状況

淀川水系、木曽川水系および万尾川水系の 3 地域に限定され、どの地域でも生息域の縮小がみられる。

県内の分布状況

かつては、射水平野と十二町潟周辺を流れる河川や用排水路に生息していたが、射水平野では 1958 年以後の確認記録はなく、絶滅したと考えられる。



2012年以降の記録をもとに作成

生態・生息環境

水位変動などを伴うワンドやタマリのような氾濫原環境が生息に適していると考えられ、流れが緩やかでイシガイなどの二枚貝類が見られる環境に生息する。寿命は 1 年ほど。5 月末、仔魚が二枚貝類から泳出し、6 月下旬まではミジンコなどの動物性プランクトン、以降は付着藻類などを食べて成長し、泳出後 3 か月で成熟して産卵する。9 月から 10 月にメスは二枚貝類の出水管から産卵管を挿入して産卵する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修や圃場整備が進み、生息地の消失・悪化、さらに産卵対象とする二枚貝類の生息地の消失・悪化が進んでいる。また、オオクチバスなどによる捕食、タイリクバラタナゴとの産卵対象である二枚貝類および餌や生息地の競合が生じている。

保全対策

本種や二枚貝類が生息可能である良好な生息および繁殖環境を維持するために、河川改修や圃場整備時の十分な配慮、さらに外来生物駆除などの対策が必要である。また、現在行われている保護池による継代飼育の継続や、仏生寺川水系矢田部川への野生復帰も重要である。

特記事項

国指定天然記念物、国内希少野生動植物種であり、生息地での捕獲などの行為は厳重に規制されている。国内 3 地域の集団は、互いに独自の遺伝的固有性を有する。

(文責：西尾 正輝)

アカザ (ナマズ目・アカザ科) *Liobagrus reinii* Hilgendorf, 1878

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

生息地の消失・悪化および個体数の著しい減少が継続している。

形態

放射状に並ぶ4対の口ひげをもち、全長8~10cmほどの赤褐色をしたナマズ。背びれと胸びれの棘には毒があり刺されると痛い。

国内の分布状況

宮城県・秋田県以南の本州、四国、九州。

県内の分布状況

朝日町、入善町、魚津市、滑川市、上市町、舟橋村、立山町、富山市、小矢部市、南砺市の河川中流から上流域。

生態・生息環境

水のきれいな河川の中流から上流域で浮き石の多い場所を好む。夜行性で石の間を縫うように泳ぎ、石に付く水生昆虫を食べている。5月頃、流れの速い瀬の石の下に卵塊を産み、オス親が卵を保護する。

生存への脅威（減少の要因）

河川上流域のダム建設によって、生息河川の中・上流域を流れる流量が減少している。また河川改修（ダム・堰堤設置、河岸・河床護岸、河床平坦化、河畔林伐採）とそれに伴い流下した土砂が川底の浮き石を埋め、生息域を狭めている。

保全対策

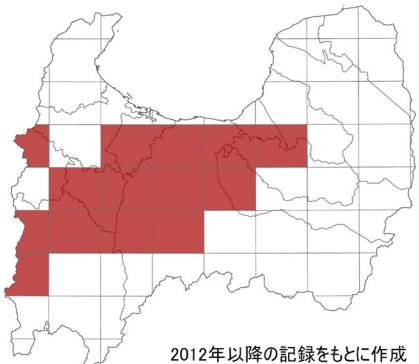
河川中・上流域の流量確保と浮き石底の確保が肝要。

特記事項

朝日町、入善町など、近年見られなくなっているところも多い。夜行性が強く日中は身を隠していることが多いため、夜間に潜水観察を行うことで確認できる可能性が高い。



撮影：不破 光大



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：不破 光大）

クロヨシノボリ (スズキ目・ハゼ科) *Rhinogobius brunneus* (Temminck and schlegel, 1845)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

生息地が局所的で個体数が少ない。

形態

全長6~8cm、最大で10cmほど。胸びれの根元に三日月斑がある。また、体の中央に断続的な黒色縦帯があり、尾びれの基底に八の字斑がある。

国内の分布状況

秋田県から九州の日本海側、千葉県以南の太平洋側の本州、四国、九州。隱岐、対馬、五島列島、種子島、屋久島、琉球列島。

県内の分布状況

氷見市北部の河川でのみ、生息が確認されている。

生態・生息環境

比較的緩やかな場所に生息する。繁殖期は5~7月で、オス親が石の下に巣巣・卵保護を行う。両側回遊魚で孵化仔魚はすぐに降海し、沿岸域で2~3か月生活した後、河川に遡上する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河床平坦化、土砂流出、堰堤の設置）による礫底の減少や生息地の消失・悪化および分断化が、生息、繁殖や移動の妨げとなっている。

保全対策

河床の平坦化や土砂流出を避け、礫底の埋没を防ぐ。また堰堤には魚類の移動可能な魚道を設置する。



撮影：不破 光大



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：不破 光大）

トミヨ属淡水型 (トゲウオ目・トゲウオ科) *Pungitius* sp.1

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧II類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群

選定理由

生息地となる湧水帯の減少に伴い生息地が減少している。庄川扇状地においては継続的な繁殖が維持されているが、黒部川扇状地の一部河川では生息数が減少している。さらに、小矢部川水系ではほぼ見られなくなっている。神通川水系ではRDBとやま2012作成以降生息が確認されていない。

形態

全長7cm程で、背びれに9本ほど、腹びれに1対、臀びれに1本の棘をもち、体側の鱗板(りんばん)には完全型と不完全型がある。体色は銀白色が強く、体側に緑色の雲状斑を備える個体が多い。また、繁殖期にはオスに黒い婚姻色が現れる。

国内の分布状況

北海道、福井県以北の本州日本海側と岩手県以北の本州太平洋側。

県内の分布状況

入善町、黒部市、魚津市、富山市、舟橋村、射水市、高岡市の湧水が流れる河川とその周辺の用排水路。有峰湖には黒部川扇状地から移入されたとされる個体群があり、常願寺川水系の個体群は有峰湖からの流下と考えられている。

生態・生息環境

扇状地の扇端部で湧水の出る河川、用排水路、細流および大河川の河川敷内の水たまりを主な生息地としており、ヨコエビやユスリカの幼虫などの小動物を食べる。繁殖期には水草の破片を固めて樽型の巣を作り、産卵された卵および孵化した仔稚魚(しちぎょ)をオス親が保護する。

生存への脅威(減少の要因)

河川改修(河岸護岸、河道直線化)や圃場整備(特に水路護岸)、また地下水利用の促進による地下水位の低下が進み、湧水が出て水草の生育する環境が減ってきている。それにともない生息域も狭まり、個体数密度も小さくなっている。生息水域が住宅地に隣接する場合が多く、生活排水の流入や生活ゴミの投棄に伴う水質悪化も懸念される。

保全対策

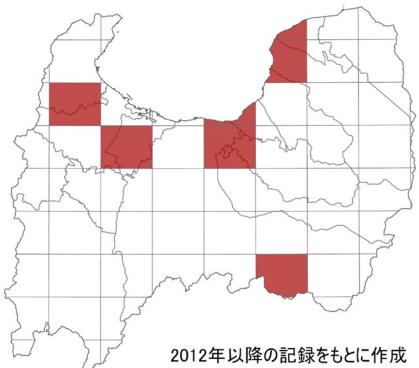
まず、地下水湧水量の確保が必要である。さらに用排水路の整備の際、川底をコンクリート張りとせず、水草の生育できる環境を整える配慮が必要である。用排水路は、所々に流れの緩い場所を作るなどして、営巣しやすい環境にすることが望ましい。

特記事項

トミヨ属の種の分類に関しては、遺伝子解析も行われているが、まだ完全に整理されていない。



撮影：齋藤 真里



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：齋藤 真里)

カジカ中卵型 (スズキ目・カジカ科) *Cottus* sp.

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IB 類

選定理由

堰堤などの河川構造物によって生息域が減少・分断され、生息環境の悪化も重なって、生息個体数が減少している。

形態

形態はカジカ（大卵型）に酷似し、胸びれの鰭条数（きじょうすう）が14～16本（モード15本）であることで分けられるが、厳密には遺伝子の塩基配列で区別される。

国内の分布状況

北海道積丹半島以南および本州の日本海側、九州北西部、瀬戸内海流入河川。

県内の分布状況

朝日町から高岡市の河川下流から中流域。

生態・生息環境

他のカジカ類と同様に浮石の下に身を隠していることが多い。産卵も中流域の浮石の下で行い、卵塊をオス親が保護する。両側回遊魚で孵化した仔魚（しぎょ）は海へ下り、その後、幼魚となって川に上がってくる。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河床の平坦化や河道の直線化）および土砂流出により、河床の浮き石が減少するなど、好適な生息環境が消失・減少している。また、堰堤の設置により移動が阻害され、生息地の縮小が生じている。河川流量の減少による影響も大きい。網漁でアユと混獲される。

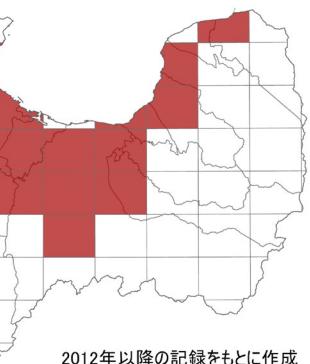
保全対策

河川の分断化を避けるための魚道は、段差が低く、流れのゆるい部分が必要。堰堤には、遡上（そじょう）できる構造の魚道を設置する。河床の平坦化を避け、河床の浮き石を確保する。夏期の河川の流量を確保する。

特記事項

従来はカジカとして扱われてきたが、主に遺伝子解析に基づき、大卵型、中卵型、小卵型（ウツセミカジカ）に大別される。外形だけで明確に区別するのは困難である。

（文責：不破 光大）



2012年以降の記録をもとに作成

カンキョウカジカ (スズキ目・カジカ科) *Cottus hangiongensis* (Mori, 1930)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：地域個体群
(東北・北陸地方のカンキョウカジカ)

選定理由

富山県が分布の西限にあたり、縁辺個体群としての希少性が高い。また、堰堤の設置によって遡上（そじょう）が妨げられて生息域が減少し、生息環境も悪化しており、生息個体数が減少している。RDBとやま 2012 作成時以降も、生息地および個体数の減少が懸念されている。

形態

カジカ（大卵型）に似るが、体全体に白く縁取られた小さな斑紋が散在し、さらに、腹びれの鰭条に横縞模様があることで区別できる。

国内の分布状況

北海道南部から青森県・秋田県・岩手県・山形県・新潟県および富山県の河川に不連続に分布する。

県内の分布状況

朝日町から高岡市までの各河川の下流から中流域。

生態・生息環境

産卵期は春で、石の隙間に産卵し卵塊はオス親が保護する。両側回遊魚で孵化した仔魚（しぎょ）は海へ下り、その後川に上がってくる。

生存への脅威（減少の要因）

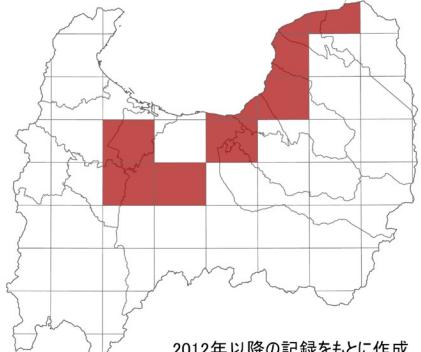
河川改修（河床の平坦化や河道の直線化）および土砂流出により、河床の浮き石が減少するなど、好適な生息・繁殖場所が消失・減少している。同時に餌環境の劣化も懸念される。また堰堤の設置により遡上が阻害され、生息地の縮小が生じている。河川流量の減少による影響も大きい。

保全対策

堰堤には、遡上できる構造の魚道を設置する。河岸護岸や河床の平坦化を避け、河床の浮き石やヨシなどの植物を確保する。夏期の河川の流量を確保する。



撮影：不破 光大



2012年以降の記録をもとに作成

（文責：不破 光大）

シンジコハゼ (スズキ目・ハゼ科) *Gymnogobius taranetzi* (Pinchuk, 1978)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

全国的に分布の限られた種で、富山県でも生息場所が中・西部の潟周辺に限られている。生息環境の悪化や外来魚の侵入により生存が危ぶまれる状況が続くが、RDB とやま 2012 作成以降に生息地の変更があり、射水市周辺では確認ができなかった。

形態

全長 7cm ほどの小型のハゼで、ジュズカケハゼやビリンゴに酷似する。体側に黒みを帯びた斑紋が並んでいるが、生息環境によっては消えている場合もある。頭部感覚管（眼上管）の開孔が 2 対 4 個あることで他種と区別されているが、開孔数が 0~8 個まで様々な変異がある。メスの第 1 背びれ後方に黒斑がある。



撮影：稻村 修

国内の分布状況

富山県、石川県、福井県、島根県。

県内の分布状況

氷見市の仏生寺・万尾川の各水系。2024 年の調査では氷見市で多数の確認ができたが、射水市の庄川周辺調査では確認できなかった。



2012年以降の記録をもとに作成

生態・生息環境

汽水域から淡水域にかけて生息し、潟や潟に流れ込む用水路、および河川の下流域が生息地である。婚姻色はメスに強く現れ、ジュズカケハゼの婚姻色に似る。産卵は川底に穴を掘って行うとされる。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸・コンクリート化）による生息地の消失・縮小が進んでいる。また、魚食性外来魚オオクチバスに捕食されて個体数減少が危惧される。

保全対策

生息域が限られるので、生息地の保全が第一である。生息地周辺の用排水路のコンクリート化が進んで、生息適地が減っている。また、生息地のオオクチバスの駆除が必要である。

特記事項

富山県内では繁殖生態がよく分かっていない。確認できる場所が減っており、詳細調査が求められる。

（文責：稻村 修）

ジュズカケハゼ (スズキ目・ハゼ科) *Gymnogobius castaneus* (O'Shaughnessy, 1875)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

生息地が湖沼・ため池および河川の一部に限られており、どの生息地の環境も年々悪化している。一方で、新たな生息地も確認されている。

形態

最大全長 7cm ほどの小型のハゼで、体側に不規則な斑紋をもつ。外形は、シンジコハゼ、ビリンゴによく似るが、頭部感覺管（眼上管）の開孔がないことで区別される。繁殖期にはメスに婚姻色が強く現れ、背びれ・腹びれ・臀びれは黒くなり、腹部から体側にかけて黒地に黄色い横斑が顕著になる。ジュズカケハゼはメスの第 1 背びれ後方に黒色斑があるとされるが、富山県の個体には黒色斑がないためホクリクジュズカケハゼに該当するが詳細は不明で、ここでは従前から使用しているジュズカケハゼの名称とした。



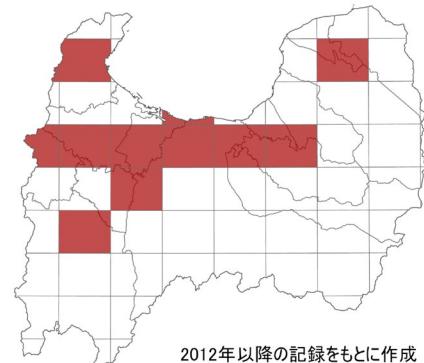
撮影：斎藤 真里

国内の分布状況

北海道から神奈川県の太平洋沿岸、北海道から兵庫県の日本海沿岸。

県内の分布状況

県内に散在するため池、ダム湖、その周辺の小河川および水路。稀に大河川の河岸に形成された水たまり。



2012年以降の記録をもとに作成

生態・生息環境

淡水域に生息し、ため池やその流れ出しで多く見られる。庄川水系の一部河川では流水域にも生息している。春の繁殖期には砂泥底に巣穴を掘って産卵すると思われるが、詳しい生態は不明である。

生存への脅威（減少の要因）

河岸や河床におけるコンクリート護岸などの整備が進み、生息地の消失や悪化が生じている。またため池においては水質の悪化や、放流された外来魚のオオクチバス、ブルーギルによる捕食を受けやすく、生存が危惧されている。

保全対策

生息地の改変を避け、生息環境を保全する。ため池はオオクチバスやブルーギルの違法放流を阻止し、これらの駆除を定期的に行う必要がある。

特記事項

富山県に分布する個体はホクリクジュズカケハゼと考えられていたが、遺伝的な研究で純粋なホクリクジュズカケハゼではないとの研究結果もあり、今後の研究が待たれる。

（文責：斎藤 真里）

ルリヨシノボリ (スズキ目・ハゼ科) *Rhinogobius mizunoi* Suzuki, Shibukawa and Aizawa, 2017

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

主に県東部の限られた河川で生息が確認されており、県西部では生息地および個体数が少ない。

形態

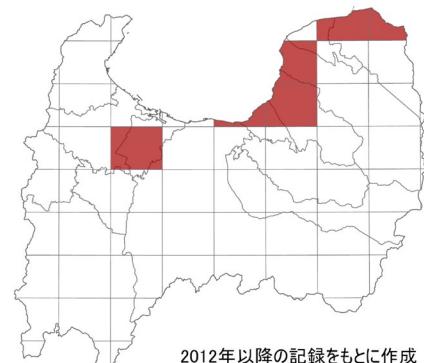
全長 8cm、最大で 12cm に達する。眼下と体側にり色の小さな斑紋が散在する。尾びれの基底に八の字斑がある。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

北海道の積丹半島から渡島半島の日本海側、下北半島西部。青森県から山口県の日本海側、房総半島南部から九州半島南部の太平洋側、九州西部、本州・四国の瀬戸内海側。



2012年以降の記録をもとに作成

県内の分布状況

朝日町、入善町、黒部市、魚津市、滑川市、富山市、射水市の河川下流から中流域。

生態・生息環境

主に河川の早瀬などの急流部の礫底に生息する。オス親が石の下に巣篭・卵保護を行う。両側回遊魚で孵化した仔魚（しぎよ）は海へ下り、その後、幼魚となって川に上がってくる。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河床平坦化、土砂流出、堰堤の設置）による礫底の減少や生息地の消失・悪化および分断化が、生息、繁殖や移動の妨げとなっている。

保全対策

河床の平坦化や土砂流出を避け、礫底の埋没を避ける。また堰堤には移動可能な魚道を設置する。

（文責：不破 光大）

シロウオ (スズキ目・ハゼ科) *Leucopsarion petersii* Hilgendorf, 1880

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 II 類
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

以前は産卵期の春に河川へ大量に遡上(そじょう)したが、現在では確認されていない。ただ、沿岸海域で確認された。RDB とやま 2012 では準絶滅危惧であったが、河川では確認記録がほとんどないことから絶滅危惧 II にランクアップした。

形態

全長 5cm ほどの小形の魚。細長い体形で全身が半透明。ハゼ科では例外的に第 1 背びれを欠く。体の中央部に気泡のような浮き袋を持つ。



撮影：稲村 修

国内の分布状況

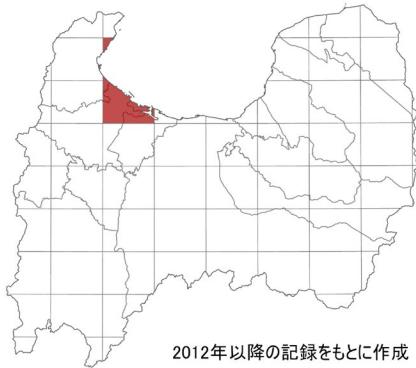
北海道南部、本州、四国、九州。

県内の分布状況

角川、庄川、氷見市の河川の河口付近。県東部の沿岸域。

生態・生息環境

沿岸域で生息しているが、春の産卵期になると水がきれいで伏流水の多い川に上がってきて産卵する。寿命は 1 年くらい。



2012年以降の記録をもとに作成

生存への脅威（減少の要因）

産卵場所となる下流や河口付近の川底の平坦化による土砂堆積や汚染により、産卵場が減少。生息場所である沿岸海域の環境変化も減少の原因と推測される。

保全対策

現状の調査を行い、生息・産卵場所を整備することが必要である。また、沿岸海域での生息調査の実施も期待したい。

特記事項

以前は河川に遡上する群を捕獲し、食用にしていた。石川県では「イサザ」という商品名で流通する。

(文責：稲村 修)

ミナミスナヤツメ (ヤツメウナギ目・ヤツメウナギ科) *Lethenteron hattai* Iwata, Sakai and Goto, 2024

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

生息環境の悪化により、生息地、個体数共に減少している。しかし、キタスナヤツメに比べると生息範囲が広く、比較的安定した状態が維持されている。

形態

細長いウナギ型の体形をしているが、口が吸盤状で顎がないので一見して区別できる。成魚で 20cm 未満。眼の後ろに 7 個の鰓孔(えらあな)がある。対鱗(ついき)を持たない。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、眼がなく、じょうご型の口をもち、成体とはかなり異なった形態をしている。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

青森県を除く本州、四国、九州。

県内の分布状況

県内の広い範囲において、河川の上・中流域に生息する。

生態・生息環境

幼生は冷水を好み、山地・丘陵地を流れる細流や扇状地の湧水地帯や湧水が流入する用排水路で、川底に泥や砂が堆積している場所に生息し、泥の中の藻類や有機物を食べて生活する。3~4 年の幼生期の後に変態する。変態後は摂餌をせず、小礫底の平瀬で産卵した後に死亡する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河道直線化）や圃場整備（特に水路護岸）により、幼生の生育に適した砂泥底や産卵に適した平瀬が減少している。また、地下水利用の促進による地下水位の低下が進み、湧水が継続的に供給される環境が減ってきている。さらに、生息水域が住宅地に隣接し、生活排水の流入や生活ゴミの投棄に伴う水質や底質悪化および餌環境の劣化も懸念される。加えて、堰堤の設置による移動阻害とその結果としての生息域の分断および小集団化が生じている。国内外来個体が存在し、交雑による地域固有性の崩壊が懸念されている。

保全対策

湧水など冷水の継続的な確保が必要である。集排水路の改修の際、川底をコンクリート張りとせず、砂泥が堆積し、水草の生育できる環境を整える配慮が必要である。また生息域の分断化を避けるために、堰堤に魚道を設置することが必要である。国内外来個体を生じさせる意図的・非意図的な移植を行わないことが必要である。

特記事項

従来スナヤツメとして扱われていたが、外見的特徴が類似するキタスナヤツメ（スナヤツメ北方種）とミナミスナヤツメ（スナヤツメ南方種）に大別されることが明らかになった。かつては農村の用排水路に広く分布し、食物として利用していた地域もある。

(文責：山崎 裕治)

ジュウサンウグイ (コイ目・コイ科) *Pseudaspius brandtii brandtii* (Dybowski, 1872)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：地域個体群
(本州日本海側のマルタ)

選定理由

富山県が分布の西限（南限）域にあたる。富山湾の沿岸域で生活し、春の産卵期に大河川の下流部へ遡上（そじょう）するとされるが、実態はよくわからっていない。ただ、過去には小矢部川において春季にウグイと混じって産卵個体が多数捕獲されており、近年では神通川下流部で釣りにより確認されている。海洋生活期や河川での状況、稚魚・幼魚の状況などが不明であるが、釣りなどで捕獲されているのでRDBとやま2012の情報不足からランクアップした。

形態

最大で60cmほどになる。ウグイによく似ているが、婚姻色の相違などにより区別される。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

海道、青森県の太平洋岸から富山県の日本海側沿岸にかけての本州北部。本州の富山湾および東京湾以北の大きな河川。

県内の分布状況

神通川、庄川、小矢部川。

生態・生息環境

成魚は海域や河口域に生息し、5月頃に河川に遡上し下流域の礫底平瀬で産卵する。幼魚は海へ下り沿岸海域で生活するが、河川下流域に出現することもあるとされる。富山県での生息状況や遡上時期、個体数、稚魚、幼魚に関しての情報はほとんどない。

特記事項

富山県では本種とウグイを区別せず、30cmを超える大型個体をマルタ（ウグイ）と呼ぶことが多い。沿岸域のホタルイカ定置網などで混獲されている可能性が高い。なお、本種は2015年にマルタと亜種関係として分けられた。

（文責：稻村 修）

ドジョウ (コイ目・ドジョウ科) *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

農業集落排水路の改修、水田の圃場整備の進行とともに個体数が減少。キタドジョウと分けた生息状況の確認が必要。

形態

細長い体形で、全長15cmに達する。体色は腹面を除き褐色で、模様は様々なパターンがある。上唇に3対、下唇に2対、計5対の口ひげがある。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

日本全国。池沼、水路、水田、河川下流域に生息する。

県内の分布状況

全県的に見られる。平野部を流れる河川や用排水路、沼地に広く分布する。山間地の水田や周辺の細流にも分布する。

生態・生息環境

浅い水路や水田の底質が泥の場所に生息する。春頃に用排水路から水田に入り産卵する。孵化した仔魚（しきょ）は水田の中で育つ。雑食性。

生存への脅威（減少の要因）

圃場整備事業によって、水路護岸や用排水路と水田の間に段差が生じ、産卵期に水田へ入れない場所が増えた。さらに、中干しの早期化などによって田んぼでの繁殖および稚魚の成育期間の短縮などが生じて生息条件が失われた。

保全対策

高水温の湿地や水田など、産卵できるような環境を残す。田んぼへの魚道を設置している県もある。

特記事項

食用として市販されているドジョウは他地域から運ばれてくるもので、遺伝子の多様性を保全するうえで逸出や放流は避ける必要がある。

（文責：不破 光大）

アジメドジョウ (コイ目・ドジョウ科) *Niwaella delicata* (Niwa, 1937)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

富山県の角川が日本海側の分布東限にあたる。ダムや堰堤の設置や河川工事による生息環境の悪化が進んでおり、境界の角川のみならず全域で個体数減少が懸念されることから、RDB とやま 2012 の地域個体群からランクアップした。

形態

外観はシマドジョウに似るが体はより細長く、背びれ、腹びれ、臀びれは、比較的後方にあり、胸びれの骨質盤は発達しない。背面や体側の模様は特徴的だが変異がある。吻(ふん)には眼を通る黒い斜線はない。口唇は厚く吸盤状に発達する。



撮影：斎藤 真里

国内の分布状況

富山県、石川県、福井県、長野県、岐阜県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、奈良県。

県内の分布状況

角川から小矢部川までの河川上・中流域。

生態・生息環境

山間の河川の上流域から中流域にかけての早瀬から平瀬の礫底にすむ。冬期は伏流水に入り越冬するといわれる。主に珪藻類を食べるが、ユスリカなどの水中昆虫も食べる。日中には川底の石の上で付着藻類を食んでいる姿がよく見られるが、季節によっては夜間も活発に活動することが知られている。

生存への脅威（減少の要因）

ダムや堰堤などの建設および河川改修（河床平坦化や土砂流出）によって河床構造を変化させ、生息地の悪化や減少をもたらしている。また、伏流水で越冬・繁殖を行うと考えられていることから、伏流水の減少や消失も生息に大きな影響を与える。

保全対策

河床の平坦化や土砂流出を避け、浮き石を確保し、礫底の埋没を避ける。

特記事項

体側斑紋に 2 型（斑紋収束型：G タイプ、斑紋分散型：S タイプ）があり、それぞれ地理的、遺伝的に分化していることが明らかになっている。今後の研究が待たれるとともに、地域ごとの保全が求められる。

(文責：斎藤 真里)

ナマズ (ナマズ目・ナマズ科) *Silurus asotus* Linnaeus, 1758

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

食物網の上位に位置する魚食性の魚であり、主に河川下流域や用排水路など緩やかな流れの水域に生息する。河川改修や農地整備に伴う生息地の減少や、用排水路の改修によって田んぼとの移動ができなくなつて個体数が減少した。RDB とやま 2012 作成時と比べて生息場所の状況に変化は少ないが、ナマズ釣りがブームになり広い範囲において生息情報がでてきたことから、絶滅危惧 II 類からランクダウンした。



撮影：稲村 修

形態

頭部は扁平で、下あごが上あごより前に突き出る。上あごと下あごに 1 対ずつ（稚魚では下あごに 2 対）の口ひげがある。体色は一般的に暗褐色で黄緑色の不規則な斑紋があるとされるが、県内では全身真っ黒な個体が多い。成魚で全長 60cm に達する。

国内の分布状況

日本全域に分布するが、九州、四国、本州は自然分布で、富山県を含めた東日本の集団は移植とされる。

県内の分布状況

県内全域の河川下流域や用排水路に生息するが、河川勾配が比較的緩い県西部に多い傾向がある。

生態・生息環境

河川の中流域から下流域に生息し、他の魚やカエルなどを食べる肉食性である。5 月頃、河川の本流から支流や水田に侵入して浅場に生える水草などに産卵するとされるが、現在の繁殖状況は不明である。日中は草陰などにいるが、夜行性で夜になると活発に活動する。

生存への脅威（減少の要因）

改修工事などにより、産卵場所となる水田と生息場所である河川本流や用排水路との間に段差ができる遡上(そじょう)不可能となっている。河川下流域に流れ込む用排水路のコンクリート改修が進んでおり、生息地が減少している。外来魚の影響は不明である。

特記事項

かつては全県下の田園地帯や河川下流域周辺でごく普通に見られ、周辺に住む人たちの食料としても珍重されていた。普段は水深の深い場所におり、手ダモでの採集が難しく、釣りで確認する方法が効率的である。体表に鱗がなく、粘液でおおわれているためスレに弱い。

(文責：稲村 修)

サクラマス（ヤマメ） (サケ目・サケ科) *Oncorhynchus masou masou* (Brevoort, 1856)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

主要な水産対象魚であるが、個体数が激減したため一定の保護を必要としている。保護増殖活動が行われているが、資源は減少している。

形態

サケに似た体形で、春の遡上(そじょう)個体は全身が銀白色で背面に黒点を持つ。産卵期の秋になると桜色の婚姻色を呈する。全長 30~70cm ほどになる。

国内の分布状況

河川に遡上する個体は北海道、本州の山口県および千葉県以北。

県内の分布状況

神通川水系でまとまった遡上が見られ、小川、黒部川、庄川の各漁業協同組合でも遊漁券が販売されている。その他、片貝川、早月川、常願寺川などでは、少數の遡上が見られるだけである。年によって変動が大きいものの、全般的に遡上量が減少している。また、海域での漁獲量も少なくなってきた。

生態・生息環境

幼魚・若魚は河川内で約1年半を過ごした後、春に海に下る。約1年の海洋生活を終えた翌春に母川に遡上し、約半年を河川内で過ごした秋に上流域で産卵する。寿命は3年。陸封型をヤマメと呼ぶが、サクラマスとヤマメの交配もある。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸や河道直線化など）による瀬・淵構造の消失や、ダム・堰堤の設置によって遡上が妨げられ生息域が著しく減少・消失している。特に親魚が生息するのに必要な大きな淵の減少と、上流域への移動の制限が与える影響は大きい。また、ダムの調整機能による水量減少や夏期の渇水の影響も懸念されている。さらに、温暖化による河川水や沿岸域の水温上昇の影響も懸念される。過去に放流されていたサツキマス（アマゴ）との交雑の影響は、生態や外形上は目立たないが遺伝的な精査が必要である。

保全対策

大きな淵の造成、河川流量の確保、魚道の整備。禁漁区の拡大、禁漁期間の延長など、釣りや網漁による漁獲を制限することも必要である。また、夏期の河川水確保や水温上昇対策などが求められる。

特記事項

サクラマス種苗やヤマメ種苗が放流されているので、絶滅危惧種にとどめる。富山の名産物「ますの寿司」の本来の材料である。

（文責：稻村 修）

キタノメダカ (ダツ目・メダカ科) *Oryzias saakaizumii* Asai, Senou and Hosoya, 2012

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II 類

選定理由

水田の圃場整備や用排水路の改修、宅地開発などにより、生息地の減少および生息環境の悪化が進んでいる。

形態

従来、メダカ北日本集団とされ、2012年にキタノメダカの新称が与えられた。体側面の黒色素胞が濃く網目状になる点や、オスの背びれの切れ込みが浅い点でミナミメダカと形態的な差異がある。雌雄の区別は臀びれの形状で、オスでは大きく平行四辺形なのにに対しメスでは小さく三角形。

国内の分布状況

兵庫県から秋田県までの日本海側、青森県。

県内の分布状況

全県的に確認されているが、県内では朝日町をはじめとして各地で移入されたミナミメダカに置き換わっているところも多い。

生態・生息環境

ため池などの止水域や、流れの弱い用排水路や細流が基本的な生息域である。稻作の行われている地域に生息していることが多い。春になり産卵期が近づくと、水温の高いところを求めて、水田に入ろうと移動する。

生存への脅威（減少の要因）

圃場整備による用排水路の護岸や、田んぼとの落差拡大が進み、生息地が減少している。外来魚の影響も大きく、ため池では魚食性のオオクチバスやブルーギルの食害も脅威になっている。ミナミメダカの出現も確認しており、交雑による地域固有性の崩壊（遺伝子汚染）が懸念されている。

保全対策

三面コンクリート張りでも、他の条件が整えば繁殖できるが、メダカの生息可能な流れの緩い環境を確保する。異なる水系の個体の放流を行わないことが重要である。ミナミメダカの駆除も必要である。

特記事項

品種改良が進み愛好家の増加と共に放流、遺棄が各地で行われており、この結果として交雑が生じ、地域固有性のかく乱が報告されている。ウグイやハヤ類、オイカワなど、他の魚類の稚魚も区別せず「メダカ」と呼んでいる場合が多く、注意が必要。

（文責：不破 光大）



撮影：不破 光大



カジカ大卵型 (スズキ目・カジカ科) *Cottus pollux* Günther, 1873

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：準絶滅危惧

選定理由

生息環境の悪化により生息域の減少や堰堤による分断化。

形態

カジカ（中卵型）に似るが、多くは胸びれの鰭条数（きじょうすう）が12～14本（モード13本）であることで分けられる。

国内の分布状況

本州、四国、九州にも分布する。

県内の分布状況

朝日町から富山市、南砺市の河川上流域に分布する。

生態・生息環境

河川上流域の石などの下で生活する。産卵期は春で、石の下に卵塊を産み付ける。純淡水魚で卵は大きく、孵化した仔魚はすぐに底生生活に入る。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河床の平坦化や河道の直線化）および土砂流出により、河床の浮き石が減少するなど、好適な生息・繁殖場所が消失・減少している。同時に水生昆虫などの餌環境の劣化も懸念される。また、ダムや堰堤の設置により生息地の縮小および分断化が生じている。

保全対策

ダムや堰堤には、段差が低く、流れの緩い部分を設け、遡上（そじょう）を可能にする。河床の平坦化を避け、浮き石を確保する。

特記事項

従来カジカとして扱われてきたのは本種が多いが、外形や遺伝子解析に基づき、大卵型、中卵型、小卵型（ウツセミカジカ）に大別される。外形のみで明確に区別するのは困難な場合も多い。県東部では、河川によっては中・下流域でも見られる。近年、氷見市では確認されていない。

撮影：不破 光大



アユカケ（カマキリ） (スズキ目・カジカ科) *Cottus kazika* Jordan and Starks, 1904

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 II類

選定理由

遡上（そじょう）個体の継続的な確認がされている一方で、堰堤による生息域の分断が著しく、遡上範囲が狭められている。河川改修による生息地の環境悪化もある。

形態

頭部が大きく、鰓蓋（えらぶた）に鋭い棘を4本もつ。体色は環境に合わせるが、地色は灰色が基調で、体の背面に大きな黒斑を二つもつ。全長20cmほどになるが、大型は稀である。

国内の分布状況

太平洋側は茨城県以南、日本海側は青森県以南の本州、四国、九州。

県内の分布状況

県内の広範囲において、河川中・下流域に生息する。

生態・生息環境

夏場は河川の中流域まで遡上し、秋から冬は下流域～河口域に下る。産卵は冬、海岸から河川河口域の石などの下で行われる。仔魚（しげよ）は沿岸海域で過ごし、幼魚は春に河川に遡上してくる。日中は淵にある大きな石の下にいることが多い。魚食性が強く、アユやハゼ類などを食べる。

生存への脅威（減少の要因）

堰堤の設置は、海からの遡上を妨げ、生息地を狭める主因となっている。また河岸護岸や河床の平坦化、さらに河道の直線化により、主要な生息場所である淵が減少している。ダムの調節機能により大きな出水が少なくなっているため、生息場所の石礫が埋まって浮き石がなくなり、身を隠す場所が少なくなっている。また、夏期の減水や瀬切れにより、生息地が干上がることが多い。

保全対策

堰堤には、カジカ類が遡上できるような構造の魚道を設置する。成魚が潜むことのできる淵を造成する。夏期の河川流量を確保する。



撮影：不破 光大

（文責：不破 光大）

ドンコ (スズキ目・ドンコ科) *Odontobutis obscura* (Temminck and Schlegel, 1845)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県西部の河川にのみ生息し、個体数も多くはない。全国的に分布のほぼ東限にあたる。

形態

カジカ類とハゼ類の中間的な体型をしており、体はざんぐりしていて、頭部はやや縦扁(じゅうへん)し、尾部は側扁(そくへん)する。体色は暗色で、体側上部に複数の大きな黒色斑がある。

国内の分布状況

本州の愛知県以南、四国、九州。日本海側では新潟県以南に分布するが、新潟県は国内外来種の可能性がある。

県内の分布状況

高岡市、小矢部市、南砺市、氷見市の河川の上・中流域。

生態・生息環境

主に河川の上・中流域の砂底や礫底の流れの緩やかな場所に生息する。一生を淡水域で生活する純淡水魚。石や倒木の下などに卵を産みつけ、孵化するまでオス親が保護する。孵化した仔魚(しぎょ)は、直ちに底生生活を送る。昆虫、甲殻類、魚類などを捕食する。

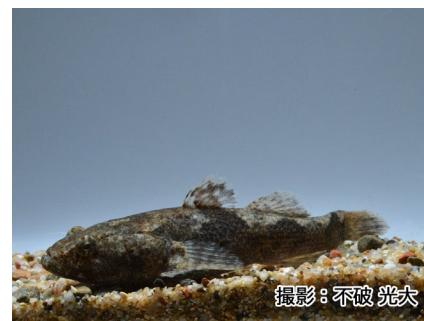
生存への脅威(減少の要因)

河川改修(河岸護岸、河床平坦化)による生息地の消失・悪化および分断化が、生息・繁殖を妨げている。

保全対策

河川改修の際、川底をコンクリート張りとせず、砂礫底を確保することが必要である。

撮影：不破 光大



ビリング (スズキ目・ハゼ科) *Gymnogobius breunigii* (Steindachner, 1880)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

片貝川の河口において繁殖地が確認されているが、県東部は急流河川が多く、このような環境は稀である。RDBとやま 2012 作成以降に新たな生息地が確認されたため、情報不足からランクアップした。

形態

シンジコハゼ、ジュズカケハゼに似るが、体側の模様は明確でなく、婚姻色も両種のように腹部から体側にかけて濃い黄色味を帯びない。頭部感覚管(眼上管)の開孔は3対で、両眼間隔域に孔器列がない。

国内の分布状況

北海道から種子島にかけての各地に広く分布する。

県内の分布状況

黒部川から氷見地方の河川にかけて広く分布するが、流れが緩やかな砂泥底の河口域に限られる。

生態・生息環境

汽水域から淡水域に生息し、主に河川河口域の砂泥底で見られ、稀に下流域まで遡上する。繁殖期は春で、オスは泥底に穴を掘るか、他の生物の掘った穴を巣穴として利用し、巣穴の壁面に産み付けられた卵を孵化するまで守る。孵化仔魚(しぎょ)は海へ下り、しばらくして川へ遡上(そじょう)する。

生存への脅威(減少の要因)

河川環境に加えて、沿岸域の環境変化が影響していると考えられる。河川下流部の砂泥底の水たまりがある環境が繁殖のために必要であるが、保全されていない。

保全対策

砂泥底が発達しない河川河口域ではあまり見られないことから、砂泥底の河川河口域の保全が重要であり、護岸工事や埋め立てなどによる生息環境の悪化を防ぐ。

撮影：斎藤 真里



(文責：斎藤 真里)

カワヨシノボリ (スズキ目・ハゼ科) *Rhinogobius flumineus* (Mizuno, 1960)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

富山県の上市川が日本海側の分布東限にあたる。県内河川の中・上流域に広く分布するが、生息域の河川改修が進んでおり、上市川に限らず個体数減少が懸念されるため、RDB とやま 2012 で「絶滅のおそれのある地域個体群（上市川）」としていたが、準絶滅危惧にランクアップした。

撮影：不破 光大



形態

体長 7cm ほどの小型のハゼで、他のヨシノボリ類に似るが、胸びれの鰭条数（きじょうすう）が 15～17 本と他のヨシノボリ類（19 本以上）より少ない。

国内の分布状況

本州の静岡県・富山県以南、四国、九州。

県内の分布状況

上市川以西の各河川の上・中流部。氷見の小河川では下流部にも生息する。

生態・生息環境

河川陸封性で、主に河川の中・上流域にすむ。一般的に他のヨシノボリ類より上流域に生息するが、勾配が緩い氷見の小河川では下流域で混生する。初夏、オス親が石の下を掘って巣をつくり、メスに産卵させる。孵化した仔魚はすぐに底生生活を始める。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河床平坦化、土砂流出、ダム・堰堤の設置）による礫底の減少や止水域の出現が生息に影響を与える。また、夏期の渇水による生息地の消滅も問題である。

保全対策

河床の平坦化や土砂流出を避け、礫の埋没を避ける。河道の流水部を通年にわたり確保する。

（文責：稻村 修）

ニホンウナギ (ウナギ目・ウナギ科) *Anguilla japonica* Temminck and Schlegel, 1847

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：絶滅危惧 IB 類

選定理由

以前は天然のウナギが多く捕れたといわれているが、近年ではほとんど見られない。しかし、十分な確認が困難であり、過去と比較できる情報が乏しい。現在の実態は明らかではないが、環境 DNA 調査などで河川下流部での確認が少しある。また、放流もされているが放流実態もつかめない。

形態

体は細長いいわゆる「うなぎ形」で、背面は黒味が強く、腹面は白で、時に黄色みを帯びる。海から河川に戻ってくる幼魚は透明なのでシラスウナギと呼ばれるが、富山湾での記録は見当たらない。



撮影：稻村 修

国内の分布状況

琉球列島以北の本州、四国、九州、北海道。日本海沿岸には少ない。

県内の分布状況

常願寺川、神通川、庄川、小矢部川。

生態・生息環境

基本的に夜行性で、日中は石の隙間などに身を潜めている。アユなどの魚類やエビなどを好んで食べる。海に降りて産卵し、透明なレプトケファルス幼生期を経て、シラスウナギとなって晩秋から初冬頃に河川に遡上する。河川内で 5～10 年ほどを過ごし、降海して産卵場の深海域へ移動する。

生存への脅威（減少の要因）

河川改修（河岸護岸、河床平坦化）が生息に影響を与えると考えられるが、詳細は明らかではない。放流個体と天然個体の区別がつかず、具体的な対応策はとれない。

特記事項

各地で養殖ウナギが放流されており、天然個体との区別が困難である。捕獲調査は難しいが、環境 DNA 調査での確認報告があり、今後の詳細調査が求められる。

（文責：稻村 修）

ニッコウイワナ (サケ目・サケ科) *Salvelinus leucomaenoides pluvius* (Hilgendorf, 1876)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅のおそれのある地域個体群（黒部川源流の地域個体群）
環境省 2020 カテゴリー：情報不足

選定理由

黒部川源流域のイワナは、富山県でも自然個体群として維持されている唯一のニッコウイワナと考えられる。多くの釣り人が入り、かなり大きな漁獲圧にさらされて個体数が激減した時期もあり、他地域からのニッコウイワナの放流による遺伝子かく乱の恐れもある。RDB とやま 2012 作成時と比べて、生息環境の大きな変化は生じていない。

形態

体側に白色斑以外に橙色や桃色の斑紋が散在する。背面の白色斑は頭部の吻端まではない。河川下流域では、全身が銀箔色で白斑が見えにくい個体もある。



撮影：稻村 修

国内の分布状況

日本海側の鳥取県日野川および太平洋側の山梨県富士川以北の本州。

県内の分布状況

県内河川の最上流部に広く分布する。黒部川源流域では遡上(そじょう)できない滝のある岩苔小谷を除いてほとんどの谷に生息するが、岩苔小谷にも放流された個体が繁殖している。また、県東部の河川では下流部でも見られ、時に降海型も捕獲される。

生態・生息環境

昼間は大小の淵の落ち込みや流れ出し付近で流れ落ちてくる虫などを食べており、夜間は流れのごく緩やかな場所に見られる。昆虫類が主食だが、ミミズや魚類なども食べる。

生存への脅威（減少の要因）

黒部川源流域では、釣り人による過度の漁獲から絶滅も心配される状況がみられたが、個体群が回復する兆しがみえてきている。一方、断続的に放流される他地域個体との交雑による遺伝子的固有性のかく乱（遺伝子汚染）が懸念される。

保全対策

過度の漁獲をしないよう釣り人のモラルを高める必要がある。

特記事項

黒部川上流の雲の平周辺にニッコウイワナは、日本で最高地に生息する魚類と考えられる。河川上流域では漁師や釣り人による放流が行われており、遺伝的な調査を行って個体群の解析を行うことが求められる。

（文責：稻村 修）

=参考・引用文献=

- 1) 不破光大・稻村 修・伊串祐紀・草間 啓・西尾正輝, 2013. 仏生寺川の魚類. 富山の生物, (52) : 35–44.
- 2) 不破光大・稻村 修・草間 啓, 2014. 黒川の魚類. 富山の生物. (53) : 33–40.
- 3) 不破光大・稻村 修・伊串祐紀・草間 啓, 2015. 山田川の魚類. 富山の生物, (54) : 65–72.
- 4) 不破光大・稻村 修・齋藤真里・山崎裕治・池田沙穂・田村 萌, 2016. 下条川の魚類. 富山の生物. (55) : 31–39.
- 5) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2017. 郷川の魚類. 富山の生物, (56) : 28–39.
- 6) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2018. 泉川の魚類. 富山の生物, (57) : 29–39.
- 7) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2019. 野積川の魚類. 富山の生物(58) : 23–31.
- 8) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2020. 小矢部川中上流域の魚類. 富山の生物, (59) : 22–32.
- 9) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2021. 笹川の魚類. 富山の生物, (60) : 19–28.
- 10) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2022. 宇波川の魚類. 富山の生物, (61) : 19–30.
- 11) 齋藤真里・不破光大・稻村 修, 2023. 富山市山田川の魚類. 富山の生物, (62) : 20–40.
- 12) Sakai H., Iwata A., Watanabe K., Goto A., 2024. Taxonomic re-examination of Japanese brook lampreys of the genus *Lethenteron* with descriptions of two new species, *Lethenteron satoi* sp. nov. and *Lethenteron hattai* sp. nov., and re-description of *Lethenteron mitsukurii*. Ichthyological Research.
- 13) 細谷和海・内山りゅう・藤田朝彦・武内啓明・川瀬成吾, 2023. 山渓ハンディ図鑑 15 増補改訂 日本の淡水魚. 山と渓谷社. 東京. 559pp.
- 14) 稲村 修・不破光大・伊串祐紀・草間 啓, 2017. 杉沢の沢スギにおける水中生物調査-2014・2015-. 魚津水族博物館年報, 26 : 19–24.
- 15) 稲村 修・不破光大・白石俊明・草間 啓, 2019. 立山カルデラ内の池における淡水魚類 魚津水族博物館年報, 28 : 23–29.
- 16) 中島 淳・内山りゅう, 2017. 日本のドジョウ. 山と渓谷社. 東京. 223pp.